明治維新150周年カウントダウン企画

薩摩藩英國留學生同行記

Record of Satsuma Students Travel Companions

巴里（パリ）万国博覧会へ参加

参考資料／薩藩海軍史,薩摩藩英国留学生

画／竹添 星児　本文監修／東川 隆太郎

第5回 全6回

留学生らが英国へ到着してからもうすぐ二年が経とうとしているが、現在の欧州では慶応三(一八六七)年四月に行われる巴里万国博覧会(パリ万博)がもっぱらの関心事となっている。

パリ万博出品と視察員らの帰国

今年四月に開催されるパリ万博には、日本から幕府と薩摩藩、佐賀藩が正式な出品表明を行っている。薩摩藩の出品はフランス貴族モンブランの助力が大きく、五代友厚(ごだいともあつ)らが慶応元(一八六五)年の欧州視察でパリを訪れた際に予備協議を行っていたようだ。五代と新納久脩(にいろひさのぶ)、堀孝之(ほりたかゆき)の三人は、欧州視察や商社設立準備を終えた同年の十二月に日本へ帰国した。

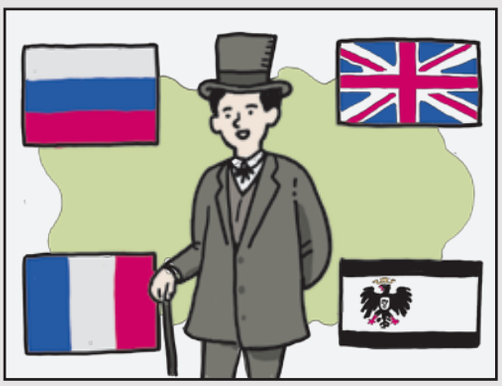
もう一人の視察員・寺島宗則(てらしまむねのり)も、イギリスとの外交交渉を行ったのち、翌年の慶応二(一八六六)年五月に帰国の途についた。帰国後の視察員らはそれぞれ薩摩藩の要職につき、今回の経験をおおいに生かしているようだ。

その後、数名の留学生も帰国し、二年目の留学生活を迎えたのは監督役の町田久成(まちだひさなり)以下八人であった。

二年目の留学生活 ハリスとの出会い

留学生らは勉学に励むかたわら、英国の議員・オリファントの助力を受けて欧州を旅行し、見聞を広げている。留学生の一人・森有礼(もりありのり)はロシアを訪れ、世情を観察し、同じ欧州といっても議論が活発な英国と、帝政を重要視するロシアとの根本的な思想の違いを感じたという。

鮫島尚信(さめしまなおのぶ)と吉田清成(よしだきよなり)はオリファントに伴われてアメリカを訪れ、新生社というコロニーを組織するトーマス・ハリスなる人物と会見した。彼らはキリスト教の厳格な教えに従って暮らすコロニーの人々の様子に大きな衝撃を受



留学生らは欧州を訪れ、見聞を広げた。

町田 久成（まちだ ひさなり）

〈天保9(1838)年 – 明治30(1897)年〉

薩摩藩英国留学生の監督役としてイギリスに渡り、帰国後は外国官判事等を務めたのち、文部省博物局を設置。東京帝室博物館（後の東京国立博物館）初代館長を務めたのち、晩年は三井寺光浄院の住職となった。

写真：鹿児島県立図書館 蔵

中村 博愛（なかむら はくあい）

〈天保12(1841)年 – 明治35(1902)年〉

薩摩藩英国留学生として英仏留学の後、帰国後は薩摩開成所のフランス語教授に就任。語学に優れ、山県有朋・西郷従道らの欧州視察にも通訳として同行し、欧州各国の領事、公使を歴任した。

写真：鹿児島県立図書館 蔵

吉田 清成（よしだ きよなり）

〈弘化2(1845)年 – 明治24(1891)年〉

薩摩藩英国留学生として英米留学し、アメリカでは大学で政治経済学を学んだ。帰国後は大蔵省へ出仕し、外国債券の募集などに尽力。米国駐在公使、外務大輔、枢密顧問官などを歴任した。

写真：鹿児島県立図書館 蔵

けたようだ。ハリスは今年のパリ万博に合わせて英国を訪れ、他の留学生との会談も予定しているという。

欧州で二年の生活を経た留学生らは、西洋の抱える問題にも気付き始め、各自の進むべき道を模索しているようだ。

パリ万博での外交

日本初の勲章発行

パリ万博には薩摩藩から家老の岩下方平（いわしたみちひら）が全権使節として派遣されており、昨年末に薩摩を出立してフランスへ向かっている。この一行の目的は、パリ万博出品とともに、五代らが用意した商社設立の契約を締結することにある。パリ到着後はまずこの商社設立の協議にとりかかるようだ。

パリ万博は今年四月一日から十一月三日までパリのシャン・ド・マルスで開催され、欧州諸国を中心に、アメリカ、エジプト、中国など多数の国が参加する。薩摩藩にとっては、薩摩焼などの工芸品を広めるだけでなく、世界に薩摩藩が幕府と同等の地位にある雄藩であることを示すための有効な機会にもなる。このためパリ万博での活動準備も着々と行われており、薩摩藩は「薩摩太守政府」という名で出品を行い、日本初の勲章「薩摩琉球国勲章」の制作も行っているという。モンブランの提言で制作されたこの勲章は、西洋人の勲章好きを利用して薩摩藩の存在を印象づけるためのもので、フランス皇帝ナポレオン三世をはじめ政府高官に贈られる予定である。

日本として初めてとなる万国博覧会の出品は、幕府と薩摩藩の関係にも大きな影響を及ぼすもののようだ。

薩摩藩はパリ万博に向けて日本初の勲章を制作した。

※本紙は薩摩藩英国留学生の当時の様子を紹介する企画です。本文中の時間は新暦とします。

次回

米国へ新しい可能性を求めて